

二〇一八年 安居本講

安樂集講要

木村宣彰

開講の辞

今夏、嚴命を被り本年度の安居本講において道綽禪師の『安樂集』を講ずることになりました。誠に以て浅学非才の身に余る責務の重さを痛切に感じております。

真宗七祖の道綽禪師の撰述になる『安樂集』二巻は、徒に学解智弁を誇るために著わされたのではなく、真摯な宗教心情を表明したものです。撰者の道綽禪師自らが本集の巻頭に、「此の『安樂集』」一部の内に、総じて十二の大門有り。皆經論を引きて証明し、信を勧め往を求めしむ。(此安樂集一部之内。総有十二大門。皆引經論証明勸信求往。)(真聖全一・三七七)と撰述の意図を表明していますが、この二十四文字は『安樂集』の内容を端的に示していると言えるでしょう。殊に「皆經論を引きて証明し、信を勧め往を求めしむ」というのは、本集の撰述の目的を明確にしたものです。『安樂集』一部十二大門は「勸信求往」の一を以て貫かれており、これは道綽禪師の混じり気のない醇乎じゆんことした信念を吐露されたものなのです。

道綽禪師は北齊の河清元年(五六二)の生まれです。当時の中国は三国鼎立の覇権を争う時代でし

た。南北兩朝に分かれて対立し、更に北朝では高氏の北斉と宇文氏の北周とが久しく宿敵として対峙していました。道綽禪師が誕生された頃の北斉は、度重なる天災と戦乱の中で、王族の奢侈のため国運は傾きつつありました。王侯貴族に保護されて栄えた仏教界は、学解を競い講経が隆盛したが、僧風は却って頹廢していました。そのような時に、道綽禪師は十四歳で出家されたのです。出家して二年後、北斉は隣国北周に攻められて滅亡しました。北周の武帝は自国で苛酷な廢仏を行い、新たに占領した北斉の地でも廢仏を断行しました。道綽禪師は出家して間もなく、亡国そして廢仏という法難に遭遇したことになります。『統高僧伝』などの伝記には、廢仏の後の道綽禪師については何も伝えていませんが、悲惨な亡国と廢仏の体験は道綽禪師の求道生活に大きな影響を与えたことは間違いないと思います。道綽禪師二十歳（五八二）のとき、北斉を滅ぼした北周もまた隋によって滅ぼされます。隋が天下を統一したのは道綽二十八歳（五八九）の時でした。このような戦乱の止むことのない不安な世情は、末法の「時」を実感させるに相応しいものでした。

道綽禪師の信仰が曇鸞大師に負うことは明らかで、道綽禪師の『安樂集』を読むときに何人も容易にそれを知ることができます。しかし、道綽禪師は、初めから浄土教に帰依した念仏の行者ではありませんでした。道綽禪師が浄土教の信仰に入られたのは四十八歳の時でしたが、その時代と求道の過程を知ることは、時機相応の教えとして浄土教を勧めておられる道綽禪師の『安樂集』を領解するた

めに欠くことができません。

道綽禪師は『安樂集』において浄土教の独立を宣言されました。龍樹菩薩が難易二道の判釈をなされたのは道綽禪師の聖浄二門の教判の淵源ですが、この二道の判釈は初地不退のための方便に関するものであり、末法の世に生きる凡夫の人生に関わる仏教が如何にあるべきかを説かれたものではありません。天親菩薩は我一心の真摯な安心の表白はなされたものの、なお浄土教に関する教相の判釈はなされませんでした。曇鸞大師は五濁の世・無仏の時を自覚して本願他力の仏力の讃仰に努められましたが、他力教の独立を説くものではありませんでした。道綽禪師は曇鸞大師の教えを受け継ぎ、時機の問題を熟考して時が機を左右する決定力を有することを知り、五濁・無仏の時に加えて「末法」の時機を自覚されたのです。

仏教の教法が分かれるのは人の機根に依りますが、人の機根は時に依ります。それゆえに時機に応じた教法のみが救いに実効があります。道綽禪師は、大乘聖教の二種勝法のうち、聖道門の一種は「今の時証し難し（今時難証）」でありますが、往生浄土門は「当今は末法にして、現に是れ五濁悪世（当今末法、現是五濁悪世）」のゆえに「唯浄土の一門有りて、通入すべき路なり（唯有浄土一門、可通入路）」と明らかにされました（真聖全一・四一〇）。当時、聖道の諸宗において強調される最勝の教とは、仏の教法の比較に立った最勝であり、末法の時代に生きる凡夫にとっての最勝ではありませんでした。

暴風駛雨の凡夫、改悪向上の望みの失われた末世の凡夫にとつて、最適最良の教えこそが切実に望まれていたのです。ここに教法を見る立場は、仏の教説の勝劣より末世凡夫の救いへと大きく転換したのです。

道綽禪師の浄土教史上に於ける功績は聖浄二門の決判です。この決判は聖道門に対して浄土門の優位を主張するものではありません。聖道門の諸教の勝れた特性を否定することなく承認します。しかし聖道門の諸「宗」は、末法の我等には「今時難証」であり実効がないと明かしています。従来、聖道門の教相判釈は千差万別ですが、みな衆生の機類が教法によって教導されて機に変化が生ずることを予想しています。衆生の機の熟未熟を前提にして教相判釈がなされたのです。然るに道綽禪師は、現実の歴史社会を直視し、自己の機を反省して、深刻な末法の到来の自覚を生みました。世界と衆生との見方が一変し、今の時の我ら凡夫の機に対しては、上来の正法・像法の時に向上可能な機を前提に施設された教法はもはや適応性を失っています。このような新たな立場に立つとき、従来の最勝の「宗」を追求する宗派の価値を逆転することになります。

このような立場は道綽禪師よりも以前の三階教の信行（五四〇―五九四）の主張と共通するところがあります。三階教の信行は、時機が下るとともに、教法の価値が変じて最勝の法門も今の末法の時においては凡夫救済の実効を失うと考えました。「時」としては、仏滅後初めの五百年は第一階、次の

五百年は第二階、第三の五百年以後は第三階となし、この「時」に応じて「教」を三階に分ち、それぞれ一乗と三乗と普法を配し、「機」についても第一階は最上利根の一乗の機根であり、第二階は利根正見の三乗であるが、第三階の末法時は一闡提や増上慢の空見有見の衆生のみと説いています。第一階や第二階の教法は優れたものであるが、今の我等には救済の実効がないと断じたのです。教法の評価をその内容に依らずに時と機とに照らして判定しています。信行の仏教は、旧来の仏教における「宗」の観念と一線を画したものでした。『統高僧伝』卷十八「本濟伝」には「信行禪師は、創めて異部を開けり（信行禪師、創開異部）」（大正五〇・五七八上）とあります。信行は創めて「部」を開き、先達を包括して後賢を啓則したのです。これは従来の仏教宗派とは異なるものでした。そこで信行の没後、教団を率いることになる本濟（五六一―六一五）は「欣然として北面し部を承け（欣然北面承部）」（大正五〇・五七八上）たのでした。

善導大師は各地を歴遊し、西河（山西）に道綽禪師を訪ねられました。そのことを『統高僧伝』には、「寔寓を周遊し、道津を求訪す。行きて西河に至り、道綽の部に遇う。ただ念仏して弥陀の浄業を行ずるのみ（周遊寔寓、求訪道津。行至西河、遇道綽部。惟行念仏弥陀浄業）」（大正五〇・六八四上）とあります。学者は「道綽部」とあったのを「道綽師」と読み替えています。善導が訪ねたのは道綽師ではなく、道綽の「部」でした。道綽の「部」とは、末法の世の時機相応の新しい仏教を求める門徒たち

の集まりでした。

道綽禪師は『安樂集』の第一大門で、仏教の教法はその時代とその時代の機根に適っていなければ実効がないことを経論に依って証明し、末法の現今の人々は念仏によって往生を願うべきであることを諄々と説いています。第三大門では龍樹菩薩の難易二道や曇鸞大師の自力他力の判釈を承けて、聖道・浄土の二門の決判をなしています。道綽禪師は末法の時代には浄土の一門こそ通入すべき路であることを明かされたのです。一代仏教の中に独尊の「宗」を立てて開宗しようとするのではなく、聖道の諸宗はただ今の末法の「時」の凡夫の「機」には相応しくないことを説き明かし、浄土の「教」の独立を説いたのです。

道綽禪師の『安樂集』は、浄土教に関する要文を撰集した「集」の形式の聖教です。それゆえに諸経論の引証を最も重視しています。諸経論の要文を挙げ、禪師自らの文章は甚だ少なく、殆どが引用文で構成されています。経論の引用文が前面に押し出され、道綽禪師は背後に退いているのです。弱齡より恭讓を以て知られる道綽禪師の性格にも因りますが、寧ろそれよりも深い意図があるように思われます。道綽禪師は引用の経論の要文の中に自らの信念を確かめています。自らの信念によって経論を読み理解したために、本集に引かれた引用文と経論の原文との間に語句の出入りが認められるのです。例えば、第一大門に「今の時の衆生を計るに、即ち仏世を去りたまいて、後の第四の五百年に

当たれり、まさしくこれ懺悔し福を修し、仏の名号を称すべき時の者なり」(真聖全一・三七八)とありますが、『大集月藏經』の經文には「懺悔修福」などの文字はありません。これは道綽禪師の徹底した求道に基づく信念で以てこれが經典の真意であると表明されたのです。自らの信念が仏の教えの中に位置を占めることによって、その人の確乎たる信念が認められます。決して恣意的な書き替えではありません。しかし、学者は道綽禪師の經典の引文を「みな恣意的な思ひつきからである」と酷評し、「信念といふものはどんなことでもさせるものだといふことになる」と厳しく批判します。道綽禪師は自ら真摯な求道によって体得したことが、確かに經典に説かれていると信じ、それを『安樂集』に著わされたのです。道綽禪師の言葉には無理がなく、自信に満ちています。

末法澆季の凡夫には聖道門を捨てて浄土門に入り、阿弥陀仏に帰依して西方浄土に往生すべきことを説かれたのが、道綽禪師の『安樂集』です。及ばず乍ら撰者の生き方に倣って恭讓なる態度で尊い聖教を拝読したいと思えます。

二〇一八年七月一七日

木村 宣彰

目次

開講の辞

序論 道綽の生涯と求道	1
-------------	---

(一) はじめに	1
(二) 道綽の伝記資料	3
(三) 道綽の出生	14
(四) 道綽の出家	17
(五) 廃仏とその後の求道	20
(六) 慧瓊門下での修行	26
(七) 道綽の廻心	30

(八) 道綽教団の教化	37
(九) 道綽と末法思想	39
(十) 『安楽集』の撰述とその思想	41
本論 『安楽集』の浄土教 —— 本文解説と考察	46

第一大門 —— 時機相応の仏教	50
(一) 教興の所由	56
(二) 説聴の方軌	65
(三) 聞法の宿縁	67
(四) 諸経の宗旨	70
(五) 諸経の得名	74
(六) 説人の差別	75

(七)	身土の三相……………	76
(八)	凡聖の通往……………	87
(九)	三界の摂不……………	93

第二大門 —— 菩提心の意義を論ず——

(一)	発菩提心を明かす……………	96
(二)	異見邪執を破す……………	102
(三)	広く問答を施す……………	114

第三大門 —— 聖道門と浄土門との決判——

(一)	難行道・易行道を弁ず……………	129
(二)	時劫の大小不同を明かす……………	134
(三)	輪廻無窮・受生無数を明かす……………	135
(四)	聖教を引いて証成す……………	150

第四大門 —— 念仏者の得益——

(一)	六大徳の相承……………	153
(二)	念仏三昧を宗とす……………	162
(三)	問答解釈……………	169

第五大門 —— 聖道門と浄土門の勝劣——

(一)	修道の延促を明かす……………	173
(二)	此彼の禅観を比較す……………	176
(三)	此彼淨穢二境を比較す……………	177
(四)	聖教を引いて勸信す……………	177

第六大門 —— 十方浄土と西方浄土の比較——

(一)	十方浄土と西方浄土とを比較す……………	178
(二)	義推する……………	179

(三) 經の住滅を弁ず	181
第七大門 — 娑婆世界と西方淨土の比較	182
(一) 此彼の取相縛脱を料簡す	182
(二) 此彼の修道について比較す	183
第八大門 — 往生淨土の意義	186
(一) 諸經典を挙げて来証す	186
(二) 弥陀・釈迦の二仏を比較す	190
(三) 往生の意を釈す	191
第九大門 — 穢土と淨土の比較	194
(一) 苦樂善惡の相對を比較す	194
(二) 彼此の壽命の長短を比較す	195
第十大門 — 淨土往生と仏果	198
(一) 『大經』によつて類を引いて証誠す	198
(二) 廻向の義を釈す	199
第十一大門 — 往生者の行緣	201
(一) 善知識に託して西に向かう意をなす	202
(二) 生緣の勝劣を弁ず	203
第十二大門 — 勸信求往	205
(一) 『十往生經』に就きて証となし往生を勸む	205
(二) 廻向	210

結びに

凡 例

一、出典については以下のように略記した。

『真宗聖典』	↓	聖典
『真宗聖教全書』	↓	真聖全
『大正新脩大藏經』	↓	大正
『大日本統藏經』	↓	卍統藏

一、原漢文のものは、原則、延べ書き文とした。ただし、その漢文の訓み方は筆者による。

一、旧漢字は、原則として常用漢字に改めた。

序 論 道綽の生涯と求道

(一) はじめに

中国浄土三祖師の曇鸞・道綽・善導のうち道綽の現存唯一の著作である『安楽集』を講ずるにあたり時代背景を概観したいと思う。道綽は如何なる時代・社会に生き、如何なる生涯を送ったのか。特にその求道の歷程を考察し、次に『安楽集』の思想とその意義を明らかにしたい。

道綽は、北齊の武成帝の河清元年（五六二）に生まれ、唐の太宗の貞観十九年（六四五）四月二十七日、石壁山玄中寺で示寂する。道綽の八十四年にわたる生涯は中国仏教史上における大きな変革の時期に相当していた。五世紀から六世紀は南北朝の政治的分裂の時代であった。江南では四二〇年に東晋に代わって宋が興り、河北では四三九年に北魏が華北を統一し、南北両朝の対立する様相が確立する。南朝では、宋、齊、梁、陳の四王朝が相次ぎ、北朝では、北魏が東魏と西魏とに分裂し、それぞれ北齊と北周に引き継がれた。この時期を南北朝時代と呼んでいる。南北朝時代の仏教は、南朝と北

朝ではそれぞれ特色ある仏教を展開した。広大な領域を有する中国において南地と北地とでは気候や風土が異なり、人々の思想的な志向や人情に相違が生ずることは至極当然のことであった。南朝宋の劉義慶（四〇三―四四四）の編になる『世説新語』『文学篇第四』には楮季野と孫安国との問答が載っている。

楮季野が「北人の学問は、すべてを総合し、あくまでも広い」と評すと、孫安国は「南人の学問は、透徹していて、簡潔で要領を得ている」と答えている。支道林はこれを聞いて「北人の読書はあたかも明るいところで月を見るようなもので、南人の学問は窓から日のをのぞくようなものだ」と語った。

『世説新語』『文学篇』のこの一節は南朝と北朝との学風や気風の相違を述べたものとして有名である。仏教についても南北の両地で学風が相違する。天台智顛（五三八―五九七）は『摩訶止観』卷五上（大正四六・五二中）で南地と北地の仏学における違いを「誦文の法師」と「闡証の禪師」と表現している。智顛は北地の仏教者を「禪師」といい、南地の仏教者を「法師」と呼んでいる。隋の時代に活躍した智顛は、政治的な南北の統一と同様に、仏教学においても誦文の法師と闡証の禪師との一方に偏することなく、止観双備、解行不二の姿勢を堅持するよう努力し「智目行足もて清涼池に到る（智目行足到清涼池）」（『法華玄義』卷第三下（大正三三・七一五中））と語っている。もし解と行とが乖離すれば

仏教の究極目標を見失うことになるからである。

北朝の北齊に生まれた道綽は、真摯に禪定を修めて禪師と尊称されているが、後に述べるように浄土教に帰依するまでの三十年間は専ら涅槃學者として『涅槃經』の研究と講説に務めていた。伝記によれば曇無讖が訳した『涅槃經』四十巻を講ずること二十四遍にも及んだ。ところが、晩年には『涅槃經』の講説を捨てて浄土教に帰入された。そのことを明らかにするために、先ず道綽の伝記資料について述べる。

（二）道綽の伝記資料

一般的に偉大な宗教家はその感化を受けた信奉者や後継者によって聖者と仰がれるようになり、その生涯の事跡は徐々に潤色されて神秘化偉人化が進むものである。それゆえ個人の生涯の事績を知ろうとすれば、主題となる人物を正確に生き生きと描くのは同時代の作者による伝記である。道綽（五六二―六四五）の場合には、幸いに同時代に生きた学僧が伝記を書き残している。著名な仏教史家として知られる道宣（五九六―六六七）が『続高僧伝』を著わしている。また道綽と同時代の浄土教の僧である迦才（一六二七―）が『浄土論』の中に道綽の伝記を書き残している。それぞれの立場を異にしたながらも道綽の生涯を知るうえで共に貴重な記録である。

(1) 先ず唐道宣の撰になる『続高僧伝』巻二十の「唐并州玄中寺釈道綽伝」について概観する。道宣は南山律宗の祖であり、護法の念の厚い仏教史家としても知られる。その編著に『続高僧伝』三十巻、『広弘明集』三十巻、『大唐内典録』十巻、『集神州三玉感通録』三巻などがある。道宣の『続高僧伝』三十巻は、梁慧皎が撰した『高僧伝』を継いで南北朝後半期から唐初までの高僧の伝記を編纂したものである。道綽よりも三十四歳の後輩に当たる道宣が『続高僧伝』の撰述を完成して序文を附したのは貞観十九年(六四五)であった。道宣はその『続高僧伝』巻二十の習禅篇に「唐并州玄中寺釈道綽伝」を立伝し、そこに殊更に「綽は今年八十有四なり、而も神氣明爽にして、宗紹存せり」(大正五〇・五九四上)と付記している。道宣が「今年」と記したのは貞観十九年のことである。

道綽は同年の四月二十四日に示寂している。道宣は道綽がなお生存していることを確認しながら道綽の伝記を『続高僧伝』に載せたのである。そのことは道宣が道綽を高く評価していたことの証左である。道綽に対して尊崇の念を有していた道宣は西方浄土を願生する浄土教が広まったのは道綽の功績と認めて「西行の広く流るるは、斯れ其の人なり」(大正五〇・五九四上)と讃嘆している。それゆえ、道宣は生存中であるにもかかわらず『続高僧伝』に道綽の伝記を逸することができなかったのである。このことは同時代の人々が道綽の為人をどのように評価していたのかを知るうえで重要なことである。『続高僧伝』は、道綽の著作について曇鸞のそれと混同したと思われる箇所があるが、それにし

ても道綽の伝記資料としては第一義の資料である。

そこで以下の考察のために『続高僧伝』の「道綽伝」を意識して概略を記しておきたいと思う。

道宣撰『続高僧伝』の「道綽伝」概要

釈道綽は、俗姓は衛、并州汶水の人である。道綽は出家以前の在俗の時から村里で恭順な人柄として知られていた。十四歳で出家し、宗師の遺誥である『涅槃經』をひたすら弘伝し、二十四遍も講義をした。後に慧瓚禪師に師事し、空理を修め、しばしば善い功德を得た。慧瓚は人柄がつねに清らかで慎ましく、智慧は正しい道理を開き、その教えは北地に広く伝わり、名は晋の地(山西省太原地方)に知れわたっていた。道綽はその精神を承けて歲月を重ねた。(その後)昔の曇鸞法師の浄土教の諸々の行業を継承し、方便と真実の教えをはつきりと見極め、經論を探し求めて全てに通じるように会通して人々を教化した。わが身にかかわる事を思い、幽明の境を觀想した。それゆえ勝れた容姿となり、人々から敬慕されるようになった。いつも汶水の石壁谷の玄中寺に住居していた。その寺は斉の時に曇鸞法師が建てたものである。寺の中に曇鸞法師の碑があり、すぐれた業績が述べられている。その事は別伝の通りである。道綽は般舟三昧、方等三昧を季節ごとに弘め、九品十觀の行業を時節に分けて行い、それを継承した。かつて行道している